

南三陸町 つながる 未来通信

No.7



このニュースレターでは、
様々な仮設住宅やまちで南三陸町の方々が取り組まれている
元気の出る活動を紹介し、
これからの暮らしづくり・まちづくりに向けて、
皆さんがこのまちで大切にしていきたいと思っていることを
私たちに発見し、綴りたいと思っています。

発行元：NPO 法人コレクティブハウジング社(略称：CHC)

南三陸町に生きていく

わたし
らしい

わたしたち
らしい

暮らし・住まいを求めて

CHCのメンバー
で南三陸町に通い
始めてもうすぐ1年
半になります。わ
たしたちは、古い
も若き子どもも
安心して自分らし
く生きられるよう、
一人や小さな家族
で孤立せず、近く
に暮らす人同士が
協力し合うことや、
コミュニティでお
互いを支え合う暮
らしを当事者の皆
さんでつくり・育む
ことが大切だと考
えています。そし
て、普段はそうい
ったコミュニティ
づくりや住まいづ
くりの支援をしてい
ます。

ここ南三陸町で
も、暮らしから住
まい、まちへとつな

がる思いが様々なところで発信されてきています。この陳情書も、住民の方から出されたものです。このような思いを、住民の皆さんでやりとりしていくことこそ、古来からの知恵や文化を活かし、希望ある未来を創造するハイブリットなまちづくりにつながっていくと信じています。「南三陸町の地域性を重んじた災害復興公営住宅のコミュニティ醸成様式への陳情書」は、住民の方が南三陸町長と議会に提案し、全面採択されました。(狩野三枝)

南三陸町長 佐藤仁殿

平成24年9月7日



南三陸町の地域性を重んじた

災害復興公営住宅のコミュニティ醸成様式への陳情書

【陳情の趣旨】

多世代型で住民主体のコミュニティの形成が図れるよう、また、小世帯であっても孤立することのないよう、災害復興公営住宅の様式に、長屋式で木造の公営住宅やコレクティブハウジングなどを取り入れ、希望者には入居資格をいただきたく、ここに陳情するものです。

【陳情の理由】

・この長い仮設暮らしの中で、住民を自立に促しているものの一つは、仮設前の小さな植物への手入れや、集会所での交流です。身近に花を育てることが出来る環境が、住民、特に高齢者の閉じこもり防止につながり、隣通しを結びつけている、まさに自然の力や交流に助けられながら暮らしています。その点を鑑みますと、いずれ住む災害復興公営住宅のあり方に、今現在のコミュニティある住まい方を反映させることは、新しいコミュニティ構築においても、高齢者の自立した健全な暮らし方を叶える意味においても、とても重要だと考えます。

高齢者の自立した暮らしは、超高齢社会の町にとっては最重要課題です。

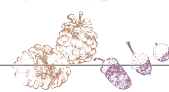
・ちいさくても私の庭があると思えることは、高齢者にとっては何よりの安心です。
安心して迎え入れる体制が必要だと思います。

・今現在の志津川高校の仮設住宅や、歌津地区の吉野沢仮設住宅など、住民に好まれている住まいの様式を、災害復興公営住宅のあり方にぜひ活かしてください。

・団地型の集合住宅の建設においては、高齢者の孤立、孤独(死)のキーワードが響き渡ることが過去の被災地の事例から危惧されます。それを回避するための様々な機能、コレクティブな機能を内包させた、人と人、人と自然が交じり合える、温かみのある、小規模の集合、コレクティブタウンを複数作って頂きたいと切に願います。

南三陸町民が一人でも多く、再び故郷に戻るためにも、ぜひこの願いをかなえていただきますよう、深く陳情いたします。次に災害に遭われる方々が、私たちの到達した明るい未来のある町づくりによって、その困難から、再び希望の光を見いだせるためにも、どうぞよろしくお願い致します。

以上の通り、陳情いたします。



●仮設住宅の質、配置に一工夫あればまだしも…

工夫のないプレハブ住宅は、地域の風土に合っていないので暮らしにくいことでしょう。木造仮設住宅に住む若いママの「なんとかいい線いきますよ」という言葉が印象的でした。また阪神淡路や中越の被災体験から生まれた改善の発想(コレクティブハウジングの考え方やふれあいセンターなど)も活かされず残念です。

一方、仮設団地の配置は並行配列。これも問題です。みんなが集まれる場を中心に、交流をうながす配慮があれば孤独感が和らいだかもしれません。

●「公平」優先の入居システムには問題あり

公平・抽選というシステム。この入居システムも過去の被災経験が活かされず課題はありました。集落が分断され、隣近所に知り合いがいないことが強い孤独感につながり、悲しく苦しい思いをした方もたくさんいました。

一方、リーダーの誘導で集落全体がともに避難し支えあい、仮設へ入居した中瀬町のようなケースもあります。仮設コミュニティの中に顔見知りが多く安心感のある暮らし。大きな教訓です。

●「距離感がいい」「発信したい」

仮設で暮らしてみて、「受難もあるが人と人の関係が豊かになった」と語る方がいます。「家と小豆は、遠目がいい」と言っていた方から、あるとき「仮設暮らしの距離感がいいと感じる」という話を聞くことも結構あります。この距離感だから生まれた「花の道」も。平成の森では、お花好きのご近所さん同士が銘々にお花を育て、とうとう仮設の路地が花の道に。そして宮城県の「お花大賞」を受賞! 積極的に自分たちから発信しようという自律心、過酷とも言える仮設暮らしの環境で“花”をキーワードに暮らしを豊かにしたすてきな事例です。



4 南三陸町へ愛をこめて

仮設暮らしは **せまい** が、
なぜか **ゆたか** な **コモン** が生まれています。

(渡邊+狩野+丹羽+塩崎)



●「集会所はいつもオープン」「地域つながる」

南方町の仮設の集会所は、いつもオープンでにぎやか。いくつもの違った集まりが居心地のよさそうな位置に散在してそれぞれの活動をしながらお茶をしたり、時に深刻な話をしたり。多世代が交わる場が生まれていることが、あたたかい賑わいともなっています。「もみ殻の枕をつくろう」と地域の農家との交流しているグループも。広域交流のお手本です。

●場があると、人は何気なく集まり、意見を交わし…

「とんとん」クラブは、男性の復権?!をかけて誕生しました。なかには女性に混ざって“きりこ”をちょきちょきしている80代の男性もいますが、中堅はえてして、女性の活動を見つめつつもなかなか“合コン”とは行きません。そこで誕生したのが「とんとん」クラブ。仮設暮らしの空間をより使いやすく、楽しく変化させようと、大工といいいまいしょうか、工作仕事といいいまいしょうか、とにかく針仕事ではなく、ガッテン仕事です。たとえば「とんとん」クラブが作った集会所の前のテーブルとベンチは、男達のコモンとしても威力を発揮している様子。自分たちでつくった場があると、人は何気なく集まり、意見を交わし、悩みや楽しみを共有しなんとなく、心が軽やかになるようです。



●コモンはいつも進行形

こんな風に、コモンはたえず進行形で、豊かさを創生していくのです。狭い我が家ながらも路地で生まれる会話に豊かさを感じ、コモンでの気兼ねない楽しみを共有する。こんな距離感は初めての体験だという方もいます。一緒におしゃべりを楽しんで感じるのには、今の経験が復興まちづくりの向かう方向を示しているのでは、ということです。いや、もしかしたら、かつての南三陸町のなかにあった豊かな人と人の関係、地域の底力かもしれません。“コモン”は日常の人と人、人と自然のなかで、共有したり、共同したり、共助したりする活動や場であろうと言うこともできます。

●持ち寄りの共助 ～自分にできることをしよう

わたしたちは「持ち寄りの共助」といっていますが、簡単に言えば、みんなで自分にできることを持ち寄って助け合おう、ということです。今、みなさんの間では、仮設での暮らしを通じて、少しずつ「持ち寄りの共助」の関係が築かれ始めているように思います。この関係は、町が復興した後でも継続していくことが重要です。行政の手の届かないところはどうやってもあります。そうしたところを、まずは町民が・地域が「持ち寄りの共助」でカバーし、それを行政がサポートしていく。未来の南三陸町のためにも、復興をとおして町民・地域・行政・専門家などのあらたな協働のかたちが育まれていってほしいと思います。

「都市計画」の夜明け

～3.11からの復興に向けて

現在、東北の被災地では復興に係る様々な計画が考えられています。この中で、今、日本の都市計画は大きな試練に直面しています。

今回の災害が街をまるごと破壊してしまうような超巨大災害であったため、東北の被災地は街をゼロから造り直さなければ

ならない状況に直面しています。日本の行政はよく縦割りと言われます。平時の都市計画の業務であれば、住宅部門は住宅、土木部門は道路といったように、縦割りの業務の中でも課題に対応することができるかもしれません。しかし、街をゼロから造る際は、縦割りで考えてもうまくいきません。住宅、生業、医療、福祉など、街での生活・活動に係る全般を総合的な視点で考えていく必要があるからです。

次に、超高齢化、人口減少社会という時代の潮流を前提に街を造る必要があるということです。お年寄りが相対的に増え、人口が縮小していく社会での暮らし方を考えると、できるだ

け街をコンパクトに計画する必要があります。今までは人口も経済も右肩上がりの時代でしたが、今後は新たな時代の潮流にあわせて、新しい街のあり方が求められています。このように、東北の被災地では復興の過程の中で、都市計画は従来とは全く異なる課題に対応しなくてはならないのです。しかし、これは東北だけの課題ではありません。東海・東南海・南海地震が起きれば大きな津波の被害を受けるとされる太平洋沿岸の地域をはじめ、日本はどの地域においても大きな災害のリスクを抱えています。そして、超高齢化、人

口減少社会は、すでに日本社会全体の問題です。東北の被災地の復興は、日本の都市計画の新たなモデルにもなるはずで

す。今、東北の被災地は、まさに「生みの苦しみ」の中にある状況です。東北の復興を、改めて日本全体で取り組むべき課題と位置づけ、オールジャパンで立ち向かっていくことが求められています。

(塩崎由人/東京大学 地域安全システム学研究室)

わたしたちの勉強メモ

他の被災地訪問のお話を伺いました

ある仮設の自治会長さんたちは新潟県の山古志を訪問しました。体験談を伺ってみますと、かなり重要なポイントがあると感じました。

立地という点については、「山古志は近くに長岡があるので、若い人はもどらないような気がする」「南三陸町には海がある、太平洋がある。立地の違いは大きいな一と、南三陸町の可能性を感じた」とのこと。しかし「一般住民は町の説明が充分わかっていないし、行政も商業や漁業には手厚いが、住民の、いわば住居の問題については手薄い」「住居は暮らしの拠点であるゆえに、このバランスの悪さを解消しないと、若い人はもどらない」、また「各まちづくり協議会も連携せずバラバラな活動では、豊かな環境を生かした南三陸町は再生できない」・・・と苦々しい声。他の地域を訪問し、先方で意見交流をすると、深く考えさせられるようです。一度、町のみんなで鳥になって、南三陸町やそこにつながる町を鳥瞰し、時にありんこになって暮らしに密着する・・・こんな感覚が必要なんだな一と、お話を伺って考えさせられました。(渡邊喜代美)



山古志訪問 の 体験談から



奥尻島訪問 の 体験談から

北海道の奥尻島を訪問された方々からも、お話を伺いました。

お話を伺って思ったのは、奥尻島の方々も南三陸町の方々も、自分たちのまちを大切に思っているということ。だからこそ、奥尻島の方は自分たちの経験を語り、南三陸町の方は20年後の未来を思い描きながら、それをしっかりと受け止めるというやりとりが生まれたのだと感じました。

例えば、今までとは違う「仮設住宅」という住まいの中に、暮らしの豊かさを見つけた方は、「奥尻島の災害復興公営住宅には共同の花壇はあるけど、管理は住民ではない《誰か》なんだよ」という話を聞いて、「責任をもって住民が関わられるような、今の暮らしぶりや地域性を大切にしたい公営住宅にしたい」と感じたそうです。また、奥尻の方からは、災害のすさまじさを現物で残して伝えることができなかったことや、防潮堤のある暮らしの景色についてもお話があり、「復興を急ぐ」ことについて様々なやりとりが生まれたそうです。早い復興を望む一方で、やみくもにスピードだけを追求すれば、住民も過程に参加することが難しくなり、自分たちの町だと感じにくい町になってしまうのかもしれない。時間が経っても、みんなで話し合って先を見据えて復興を進めるやり方のほうがいい。」という奥尻島の方の言葉が印象的でした。南三陸町の住民の方がつくられた紙芝居に影響を受け、奥尻島の防災かみしばいを作った方もいるのだとか。経験者同士の対話によって、改めて大切にすべきことをかみしめるひとときだったのではないのでしょうか。(川上英里)

発行日：2012年11月27日
発行：NPO法人コレクティブハウジング社（CHC）
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-21
ちよだプラットフォームスクウェア1175
電話：03-3315-0255／メール：info@chc.or.jp

執筆・編集
[CHC 南三陸町支援チーム]
大橋徹平、狩野三枝、川上英里、マーレン・ゴツィック、渡邊喜代美
[協力] 塩崎由人、丹羽朋子

■CHCでは、以下の助成金により、この活動を推進しています。

平成24年度 独立行政法人福祉医療機構助成 福祉活動支援事業
助成事業名：持続可能なコミュニティづくり支援

平成24年度 赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成事業
助成事業名：孤立防止と日常生活を取り戻すための手仕事コミュニティ構築